

他と協力して生活しようとする態度を育てる 異年齢集団活動の研究

- 縦割り班活動を基軸として -

相知町立伊岐佐小学校 教諭 田辺 聖子

要 旨

本研究は、小規模校（児童数74名）において、異年齢集団活動の活性化を通して、人とかかわる力や表現力の育成を目指したものである。縦割り班活動と学級活動を、児童会活動を接点に連携させることを通して、子どもたちの課題意識や活動意欲を上げていくための手立てを明らかにした。その結果、子どもたちのかかわり合う場は広がり、所属感や満足感、達成感を深めていった。さらに、その体験がリーダーシップやフォロアーシップの学びへとつながった。

<キーワード> 異年齢集団 縦割り班 かかわり合う場 対人的コミュニケーション能力

1 主題設定の理由

人は人とのかかわりを通して様々なことを学んでいくが、近年、社会の変化や少子化の傾向から、遊ばない子や遊べない子が増え、友人関係の在り方に未熟さや歪みが表れたりするなど、子どもたちの間に好ましい友人関係が構築されにくくなってきている。成田國英が「メンバーの間に体力や生活経験、能力などの面で差がある異年齢集団は、同年齢集団に比べて重要な役割を果たすことになる」⁽¹⁾と述べているように、異年齢集団活動では、調和の取れた豊かな人間性や社会性をはぐくみ、他と共生する力をはぐくむことができると考える。本校では、以前から縦割り班活動を行っているが、異年齢集団活動の効果が十分に上がっているとは言えない。また、6年生になると、少人数であるためにどの子にもリーダーとしての確かな役割が与えられるという好ましい一面があるが、同時にどの子にも大きな声を出したり、はっきりと自分の意見を述べたり、班内の話し合い進行をするなどリーダーとしての資質が求められ、その要求に悩む子も少なくない。そこで、児童会活動・縦割り班活動・学級集団を計画的に連携させれば、縦割り班活動全体にもその効果が広がり、一人一人の子どもが自主性を身に付け、友人と協力して生活しようとする構えを養うことにつながるであろうと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

縦割り班活動と学級活動を、児童会活動を接点に連携させることを通して、縦割り班活動の効果的な展開の仕方を探る。

3 研究の仮説

縦割り班と学級との間に、次のような手立てを取れば、子どもたちのかかわり合う場は広がり、課題意識をもって生き生きと活動し、進んで協力しようとする態度を高めることができるであろう。

児童会活動の企画段階に、学級での話し合い活動・班別集会・代表委員会を連動させる。

児童集会の中に、班ごとの役割を設ける。

4 研究の内容と方法

全校児童を対象に行ったアンケートから、縦割り班活動の問題点を分析する。

異年齢集団活動に関する文献や資料を基に理論研究を行う。
 児童集会等を立案・実践し、仮説の有効性を明らかにする。
 研究の成果と課題をまとめ、効果的な年間計画を探る。

5 研究の実際 1 (文献による理論研究)

集団活動の中で、子どもたちは、協調・協力・リーダーシップの発揮・フォロアーシップの学び等様々な資質を要求されるが、それは、将来の社会生活に必要とされるものである。その視点から考えると、子どもたちの一日の生活の大半を占める学校生活での様々な集団活動の在り方は極めて重要なものであると考えられる。学校で日常的な学年や学級という同年齢集団には、互いに自己主張を繰り返しながらも切磋琢磨していき、互いを高め合うことができるという効果が期待される。しかし、子どもたちはいずれ社会人となり、そこでは、上司や先輩、同僚、部下などとの円滑な対人関係を結ばなければならない。また、現代は共生の時代と言われ、様々な違いをもった人々と共に生活していくことが目指されている。そのような社会を生きる際に必要とされる対人的コミュニケーションの基礎は、多様な活動体験を通して身に付いていく。その意味で、同年齢集団活動を教育活動の基盤としながらも、その欠陥を補うという意味で、学校において異年齢集団活動を適切に構想し、多面的に生かすことは重要であると言える。さらに、小規模校では実生活での交友関係は長いスパンで固定化されている。豊かな活動を体験するという観点から、学級以外の集団活動、特に異年齢集団活動を意図的に仕組み、体験させることは重要である。また、長期的に見通しても、異年齢集団において自主的に集団活動や集団生活を創造させる機会を作ることを通して、どの児童もフォロワーから出発し、ミドルに身を置き、リーダーとしての経験をするなど、10名程度の学級で体験させることが困難な集団内の役割を一通り経験させることができると考えられるので、新たな効果も期待できる。

6 研究の実際 2 (実践化への手立て)

(1) 児童の実態把握

全校児童対象に縦割り班に関する意識調査を行った。図1のグラフから、ほとんどの子どもたちが縦割り遊びを好んでいることが分かる。また、自由記述から低学年であっても、自分たちのやりたいことも一緒にやってほしいという欲求をもっていることや、リーダーとしての役割を果たしたいけれども、低学年の友達との意志の疎通がうまく図れないという6年生の悩み、また、6年生が低学年の友達と意志の疎通が図れたときに、成就感や達成感を感じているということ等が受け取れる。その他にも、1年生に「難しいから縦割り遊びが嫌い」と答えた子ども、3年生に「みんなと遊べるし、仲良くなっている友達と遊べるから大好き」と答えた子ども等があり、遊びたいのに十分活動できないという不満と同時に、班活動への期待がうかがえる。これらの結果を手掛かりに、縦割り班活動を企画・実践するまでの活動を各学年の子どもたちに広げ、その過程での活動を活性化させることを通して、子どもたち同士がかかわり合う場を増やしていけるような手立てを、授業や活動の中で実践した。

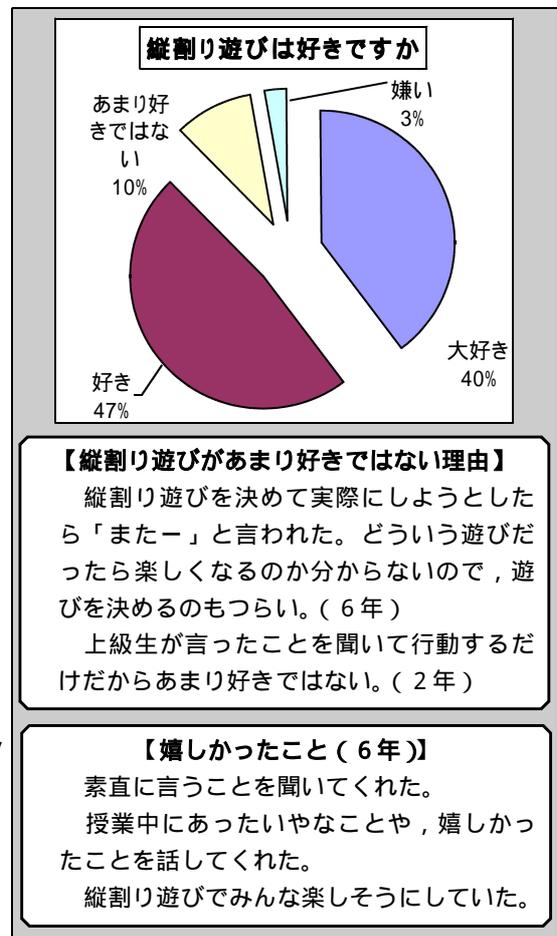


図1 縦割り班に関する意識調査

(2) 研究の全体構想

児童の実態を踏まえ、学級内の仲間づくりを進めながら縦割り班活動を基軸とした異年齢集団活動を展開していき、人とかがわる力及び表現力（対人的コミュニケーション能力）の育成を図っていききたい(図2)。対人的コミュニケーション能力とは、稲垣孝明が言う「一般的に生活体と生活体との間で行われている意思の伝達」⁽²⁾能力のことである。そして学級内の仲間づくりと縦割り班活動の接点に児童会活動を位置付け、その活動を活性化させる中で日常的な異年齢集団活動へと育てていきたい。

(3) 縦割り班活動の構想

縦割り班活動には、毎日の清掃活動に代表されるような日常的な活動と、要求や必要に応じて企画されるクリーンタイムの活動に代表されるような随時活動、児童会活動とリンクしたイベント的活動が考えられる。それぞれの活動の中で、年齢や発達段階が異なる子どもたちの様々な発想や創意を酌み取り、低学年の子どもたちには満足感を、上学年の子どもたちには成就感を与えるよう意図することで子どもたちは縦割り班活動を楽しんでいると考える(図3)。特にイベント的活動において、下学年児童の思いを上学年児童が更に工夫して自分たちの力で成し遂げていく活動を繰り返すことを通して、子どもたちの結び付きは更に密になっていくことが期待される。異年齢集団活動を計画的に構想していくことが大切である。

(4) 単元の構想

図4に示すように代表委員会と学級をつなぐ一つの方法として、縦割り班の班別集会を導入する。そこでは、低学年の思いを中心に班員の思いを伝え合い、さらに、各班のリーダーは班員の思いを知った上で代表委員会に参加する。このような流れを設定することで、低学年を含めすべての子どもたちが、自分の思いが反映される場を与えられることになり、子どもたちの課題意識や活動意欲が高まるとともに連帯感の深まりが期待される。つまり、活動の企画等を含めて、低学年の子どもたちの思いや願いを生かしながら、更に高学年が高めるとい活動を展開する。班別集会や代表委員会が稲垣孝明が述べる「目標の達成に向けて、共に活動し、『かかわり合う場』⁽²⁾となり、「そのかかわりを具現化するため、発達段階に応じて一人一人が役割を分担し『協力して活動する場』⁽²⁾として、「みんなで遊ぼう」という題材の下、「みんなで仲良くしよう集会」、「外で元気に遊ぼう」という活動を設定する。

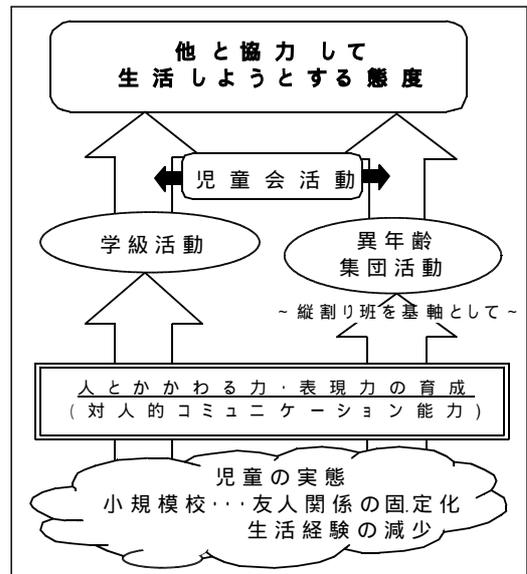


図2 研究の全体構想

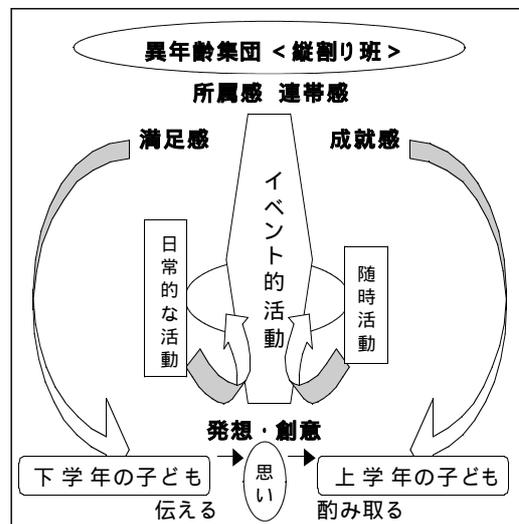


図3 縦割り班活動の構想

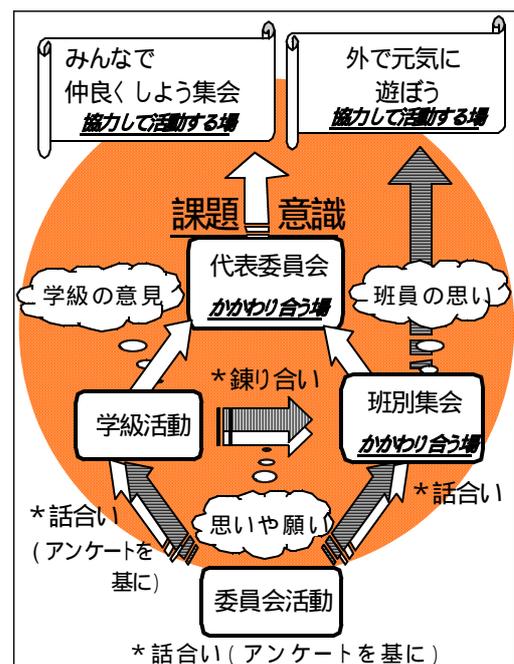


図4 単元の構想

7 研究の実際3 (授業実践による検証)

(1) 活動題「みんなで仲良くしよう集会」の流れ

対象	主な活動	教師の意図・ねらい及び考察
委員会 企画	みんなで仲良くしよう集会の原案について話し合う。	縦割り班に関するアンケートの結果を提示しながら、低学年を含めた多くの意見を生かしていくための工夫を考えさせる。
原案 説明会	原案の説明を聞き、これまでの児童集会との違いについて知る。	班別集会を導入することを伝え、代表委員会に出席できない低学年の思いも積極的に取り入れることを通して、みんなで集会を作ろうという意欲をもたせる。
全学級	原案説明会を受け、集会に向けての話し合いをする。	上級生と下級生と一緒に仲良く活動しようという集会のねらいを意識させながら、活動の内容や方法について話し合わせる。
班別集会	<p>低学年の思いを聞き入れながら、互いに自分の思いを出し合う。</p> <p>1年生から、「花びら鬼」が出ています。</p> <p><4年生> どんな遊びですか。</p> <p><1年生> (図に描きながら説明)</p> <p><6年生> 線が引けないからできないんじゃないですか。</p> <p><2年生> 床にテープを貼ればいいんじゃない?</p> <p><4年生> 大縄跳び、貨物列車、手つなぎ鬼はできそうだね。</p>	<p>楽しい集会を目指して、班の雰囲気高めさせる。</p> <p>【考察の視点 高学年と中学年・低学年との連携】</p> <p>班によって話し合いの活気に差があったが、時間がたつにつれ、次第に頭を寄せ合い、思いを出し合えるようになってきた。少人数であったために、素直に思いを伝えることができた。意図的に交流の場を作ったことが、異学年児童との自他の理解のきっかけになったと考えられる。</p> <p></p> <p><6年生> ドッジボールや三色鬼は、1チームの人数が多くなりすぎるし、だるまさんが転んだも人数が多すぎて分かりにくいくないですか。</p>
代表委員会	<p>原案に基づいて話し合う。</p> <p>ドッジボールをめぐる</p> <p>4年 僕たちのクラスでは、<ドッジボール>をしたいという意見が出ました。理由は、みんなで楽しく遊べるからです。</p> <p>2班 ドッジボールは、ひどく当たったりすると危ないと思います。それよりもジャンケン列車の方がいいと思います。</p> <p>1班 ドッジボールは1, 2年生には難しいけど、ルールを工夫すればできると思うので、ぼくはドッジボールに賛成です。</p> <p>4年 私たちのクラスでは、ドッジボールときにミニバレーボールを使って、1, 2年生には優しく投げたらうまくいくと考えました。</p> <p>大縄跳びをめぐる</p> <p>1年担任 実は1年生は、まだ大縄跳びをやってみたことがありません。できるかどうか心配です。 <u><しばらく沈黙する></u></p> <p>5年生 1年生ができないなら、集会のゲームにできないと思います。</p> <p>2班 私たちが昼休みに1年生に、大縄跳びを教えてあげます。</p> <p>6年生 あと15日もあるので、昼休みなどに教えてあげればできると思います。跳び方も工夫すればいいと思います。</p> <p></p>	<p>自分の思いを積極的に表現させ、集会への期待を高める。</p> <p>【考察の視点 リーダーシップの高まり】</p> <p>子どもたちは、話し合うことを通して、更に考えを深めているようであった。また、大縄跳びに関しての1年生担任の意見を聞いた6年生から「昼休みに教えてあげる」と発案される等、リーダーとしての意識の高まりを感じる事ができた。全体を通して6年生を中心に活発に意見交換が行われていたが、それは班別集会というかわり合う場をもったことで、班員間の意志の疎通が図れ、リーダーの自信につながったためだと考えられる。</p>
班	班の準備を進める。	役割を分担させ、自分の仕事に意欲的に取り組ませる。
児童 集会	めあてや約束を考えながら集会に意欲的に参加する。	自分の役割を自覚させ、協力して活動することを通して、集会を楽しませる。

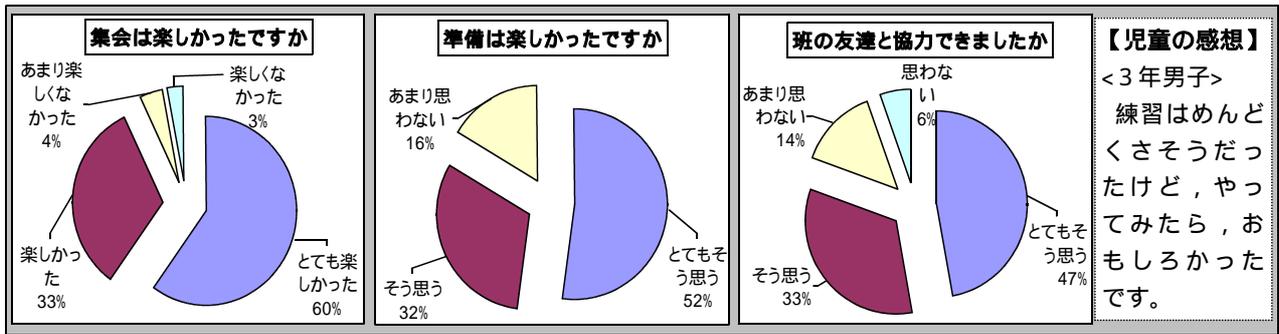


図5 集会及び班活動の感想

図5から93%の子どもたちが、集会を楽しかったととらえており、低学年との意志の疎通が難しいと考えていた6年生を見ても、<準備が楽しい>あるいは、<協力できた>ととらえている子どもが約80%を占めていることが分かる。このことから、みんなで集まってゲームをするということだけではなく、班で役割を分担するということに、子どもたちが楽しさを見い出していることが分かる。子どもたちは、班の役割を果たそうという目標をもってかかわり合う中で、より好ましい関係を築きながら、満足感や達成感を高めていったと考えられる。また、それは、感想を述べた自由記述の中からもうかがえた。

(2) 活動題「外で元気に遊ぼう」の概要

	主な活動	教師の意図・ねらい
委員会活動	「1月のくらしのめあて」実践への取組について話し合う。(環境委員会)	全校的にくらしのめあて「寒さに負けずにがんばろう」に取り組むきっかけとなるような活動を委員会活動の中で考えさせ、体育委員会の企画を起点にその後の活動を展開する。 【みんなで遊ぼう週間の概要】 班別に昼休みの外遊びを計画。班員以外の児童も自由に参加して楽しむ。 人数が増えた場合を想定しながら遊びを決めたり、やり方の工夫を考えさせたりする。 当日の体調を考え、自分の班の遊びや好きな遊びに参加させる。 ドッジボール・サッカー・大縄など
全校朝会	環境委員会の創作劇『ぼくは風の子マン』を全校で観る。	
委員会活動	環境委員会の発表を受け、各委員会での取組を話し合う。 *体育委員会 [みんなで遊ぼう週間]を企画	
学級活動	くらしのめあてについての保健指導を経て、具体的な取組について話し合う。	
班別集会	体育委員会の提案を聞き、話し合いを通して、班主催の遊びを決定する。	
班	体育委員会の計画を基に、外で遊ぶ。	

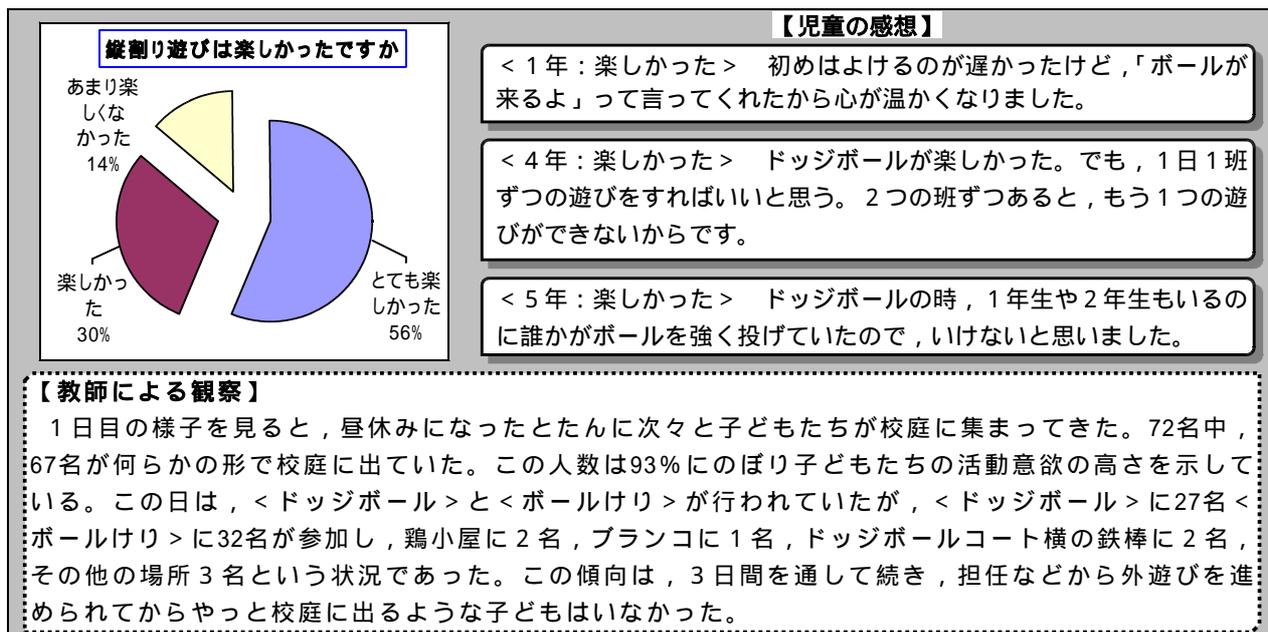


図6 遊び週間の感想及び教師による観察

同学年の友達と遊ぶ場合、競争意識が先立ち勝敗が楽しさの基準になることが多いが、異年齢間の遊びの場合、遊びそのものを楽しめたり、上級生の思いやりを肌で感じることができるようである。また、中学年になると友達の様子や企画の在り方に感想が及んでおり、課題意識が深まっている。さらに、高学年では、問題点を指摘しようとする姿勢も増してきていることが分かるなど、図6から、子どもたちの活動意欲の高さや課題意識の深まりが読み取れる。

8 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

班別集会を通して、かかわり合う場を意図的に広げていったことで、子どもたちは自他の理解を深め、課題意識をもって生き生きと活動し、異年齢相互の学び合いを深めていくことができた。

児童集会での進行や各役割りを班で担当することを通して、子どもたちの活動意欲が高まり、進んで問題を解決していこうとする態度が芽生えてきた。活動を通して、低学年は楽しさに代表される満足感を、高学年は下級生が楽しんでいることを見守るような、あるいは、意志の疎通が図れ、企画が成功したという達成感を味わうことができた。

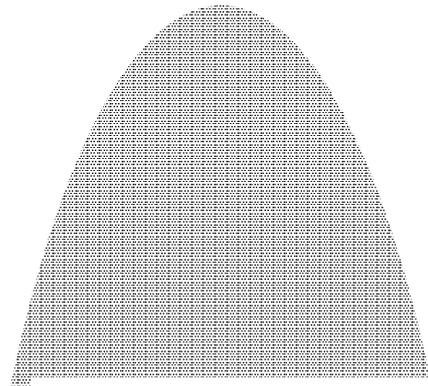
(2) 今後の課題

班別集会と学級活動との話合いに重なりがあり、子どもたちに戸惑いが見られることがあった。改善していく必要がある。

異年齢の学び合いの中で満足感や達成感を深めていく子どもたちがいる一方で、活動がおもしろくなかったり、集団を好きになれない子どもたちがいる。班編成を行った早い時期から適切な手立てが必要である。

(3) 縦割り班の年間計画

今後の課題を踏まえ、意図的・計画的に活動を続けていくために、児童会活動と日常活動を関連付けた本校の縦割りタイムの年間計画を図7のように作成した。実践に生かしていきたい。



引用文献

- (1) 成田 國英 「異年齢集団活動の効果とは何か」『特別活動研究』 2001年2月号 明治図書 p. 6
- (2) 稲垣 孝明 「コミュニケーションの基礎を築く工夫」『特別活動研究』 2001年2月号 明治図書 p. 8